夢と希望のあふれる世界へ

丹波山村立丹波中学校二年　　鶴田　佳宏

僕は、難民キャンプの小学校でサッカーをしていた。とは言っても、地面はでこぼこで、ゴールポストは無く、サッカーボールはボロボロで空気も抜けている。僕たちがいつも芝生の上でしているサッカーとの違いに苦労している横で、難民キャンプの子どもたちは裸足で、空気の抜けたボールを上手に扱っていた。とても楽しそうにサッカーをしている様子が強く印象に残っている。

僕は、父の仕事の関係で小学校の六年間をアフリカの国々で過ごした。小学校六年生の時は、ボツワナという国で生活をしていて、そこでインターナショナルスクールに通っていた。ボツワナという国は日本のようにコンビニがあるような便利な生活はできないし、砂漠化の影響で水も大切に使わなければならなかった。しかし、自然は美しく、僕が生活するうえでは、何の不自由もなく、家族や友達に囲まれて楽しく暮らすことができた。

どうして僕が難民キャンプに行くことになったかというと、僕が通ったインターナショナルスクールでは、難民キャンプと交流の機会があったからだ。六年生で難民キャンプを実際に訪問し、直接触れあうために、毎年難民について勉強する。その事前学習の中で、難民キャンプには、自分の国が危険で逃げてきた人や、家族を失ってしまった人、逃げている途中に親とはぐれてしまった子どもたちがいることを知った。自分の国から逃げてきた人達を「レフュージー」と言うと先生に教えてもらった。初めて聞く単語だった。六年生になり、僕は難民キャンプを訪問する直前、（そうはいっても、難民キャンプには小学校もあるから、みんなで楽しく暮らしているのかなぁ）と思っていた。しかし、実際に難民キャンプの小学校を訪問してみると、僕が想像していたこととは真逆だった。初めて難民キャンプの子どもたちに会い、自己紹介をする。そのときの子どもたちは、僕たちを恐れている様子で、自分の名前や自分がどこの国から来たのかは最後まで言わなかった。みんな表情が暗く、今の辛い気持ちを抱えることで精一杯に見えた。中には実際に、毎日が辛いという子もたくさんいた。僕は、みんなが楽しく暮らしているだろうと軽く考えたことをとても後悔した。

自己紹介を終えたあと、サッカーをすることになった。僕は難民キャンプの、

ある男の子と一緒のチームになった。その男の子は九歳くらいで、自分の国から逃げているときに父親とはぐれてしまい、父親の記憶がほとんど無いと言った。それを聞いたとき、どうしてこの男の子は、何も悪いことをしていないのに、自分の国から逃げないといけなかったのか。どうして僕とこの子は同じ人間なのに、この子はこんなに苦しんでいるのか。彼と僕は何が違うのか・・・。とてもショックだった。それ以上に、自分が毎日普通だと思って過ごしてきた環境と全く違う世界を目の前につきつけられて、頭の中が疑問だらけになった。

難民キャンプに行く前は、自分の国が危険にさらされている人たちがいることを知らなかった。今まで世界で起こっている内戦や紛争のニュースが流れても、自分には関係ないことだからと知ろうとも思わなかった。しかし、調べてみると、世界には紛争や迫害によって故郷を追われている人は八千万人を超えているそうだ。日本の人口の三分の二にもあたる人達が世界中で自由を奪われて生活している。僕が難民キャンプで出会った辛い状況の子どもたちが、この世界には、まだまだたくさんいるということだ。

僕は、人は生まれつきみんな平等に「自由」や自分の「夢」をもつことができると思っていた。しかし、この世界にはそうではなく、生まれたときから自由を奪われた子ども、自分の夢や希望を持つことが難しい人がたくさんいる。僕には何ができるのか。僕が直接その人達に何かすることは難しいかもしれない。しかし、今世界で起こっている現実をまず知ろうとすること、そして社会の問題に対して向き合うことが大切で、今の僕たち中学生にできる第一歩だと思う。

その男の子は「サッカー選手になりたい。」と小さな声で教えてくれた。これ以上、彼の「夢」や「希望」が奪われないような、一人ひとりが自由に生きられる世界になってほしい。他人事ではなく、僕たちがそういう世界を作っていかなければならない。